（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	佐 藤 一 進
論文題目	理論と実践としての「統治の学」――共和主義から保守主義へ		

（論文内容の要旨）

本博士学位申請論文は、今日における保守主義の混迷の原因をその理念の喪失に求め、その再発見を目指しつつ思想史的な解釈を試みたものである。

その際に重要な導きの糸となるのが、共和主義という西欧思想の伝統である。申請者は、西欧政治思想の核となってきた共和主義の伝統と、近代イギリスに成立を見る保守主義が交差するところに、保守主義の思想的な理念を見出し、その現代的な可能性を探ろうとする。

古典古代からルネサンスを経て近代に至る思想的な流れのなかで、古典的共和主義はとりわけ経済社会状況の変化による後退を余儀なくされる。しかし、それは個人の善き生と政治共同体の自律という古典的共和主義の理念の消滅をただちに意味するものではない。むしろ、近代イギリスで生成した政治経済学や文明社会論のなかに新たな道徳哲学として生成されることで、共和主義の理念は古代から近代へと継承された。18世紀イギリスにおけるそうしたプロセスの最終段階に位置するのがエドマンド・バークの思想に見る保守主義の成立であり、すなわち保守主義の理念とは個人の善き生と国家の自律であると、申請者は解釈する。

各章ごとの内容要旨は以下の通りである。

序論においては、主題設定の背景が、20世紀後半から21世紀にかけての先進諸国における保守主義の変容と退潮から説明され、マイケル・オークショットの保守主義論が批判的に検討される。そこから保守主義の理念を再解釈することの妥当性が導かれるとともに、バークのテクストに拠りつつ保守主義と共和主義の思想史的な交差の可能性が論じられる。

第1章では、多様な内容を持つ共和主義の基本的特徴を明らかにするため、共和主義の原型を抽出しようとする。具体的には、アリストテレスの定式化による「市民」像に関して、ハンナ・アレントとジョン・G・A・ポーコックの解釈を対照させつつ検討し、「自律」としての「善き生」という共和主義の理念が明らかにされる。ならびに、本論文で共和主義と保守主義の関わりを論じる際に不可欠となる「時間の政治学」の概念が定義される。

第2章では、現代アメリカの保守主義の代表例としてのネオ・コンサーヴァティヴィズム（いわゆる「ネオコン」）について概観し、現代保守主義の様相とその問題点を整理している。また、ネオコンの知的源泉と見なされるレオ・シュトラウスの政治哲学についても検討がなされ、「哲人王」や「高貴な嘘」の概念の重要性など、アレントやポーコックの解釈とは異なるギリシャ政治哲学の意味についても言及される。

第3章では、近世における共和主義の展開の様相を探るべく、大陸からイギリスへ共和主義思想を持ち込んだジェイムス・ハリントンの共和国論が検討される。そこで明らかにされるのは、建国者はいかなる存在であるかを論じる立法者論と、市民はいかなる資質を要求されるかを論じる徳論、そして有徳な市民をいかにして統治へ参与させるのかを論じる統治機構論の三要素が有機的に連関しているというハリントンの共和主義の特質である。

第4章では、ハリントンと対照的な近代国家論を構築したトーマス・ホッブズの『リヴァイアサン』について、その論理構造を明らかにすることによって、逆にハリントンの蘇らせた共和主義の特質を検討し、『リヴァイアサン』の行間に埋め込まれた古代性を抉りだしている。表面的に見ればホッブズは共和主義的な徳の必要性をしりぞけ、死への恐怖という情念と自然権に依拠する主権国家の論理を構築したが、それは古典的共和主義との絶えざる対峙から生み出された思想であること、さらにはその論理の根底には「高貴な生」という共和主義的な要素が潜んでいる点を申請者は強調する。

第5章では、ホッブズとハリントンの対照的な議論を念頭に、18世紀イギリスにおける共和主義の展開と変容がたどられる。そこで明らかにされるのが「徳から作法へ」というパラダイムの移行であり、保守的啓蒙の文明社会論と政治経済学の生成の様相である。しかし、申請者によれば、それは通常いわれるパラダイム転換ではなく、個人の善き生と国家の自律を問う共和主義的な思考様式の近代的条件のもとでの組み換えであり、共和主義の古典的な理念に対する複眼的で両義的な読み替えのプロセスであるとされる。

第6章では、保守的啓蒙のヴィジョンに内包された両義性をバークがいかに克服したかが論じられ、そこに共和主義から引き継がれた保守主義の理念の形成が位置づけられる。この場合、保守主義と共和主義が共有するのは善き生と国家の時間的な安定性を不可分とみなす「時間の政治学」というアジェンダであると申請者は解釈する。併せて、バークとハリントンの立法者論が比較され、バークが建国者としての立法者を、富と徳の結合を追求する「本性上の貴族」としての為政者へと読み替えたと申請者は論じる。

このように本論文は、保守主義という思想がその形成過程で共和主義的な問題意識から継承した「自律」という理念を明らかにし、今日におけるその理念の重要性を主張する。なお、本論文には、そうした理念の具体的な内実の現代的な展望を示すものとして、共和主義とナショナリズムの関連性を問う論文と、「西欧近代」文明を保守主義の立場からいかに整理し、理解するかをめぐる小論が補論として附されている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は西欧の政治・経済に関する思想伝統である保守主義と共和主義に焦点を合わせ、その両者の関連、およびその現代的な意味について論じたものである。申請者の問題関心は、現代における保守主義の意義を検討し、その再解釈を通じて保守主義の思想伝統の現代的可能性を探究するという点にある。この主題に肉付けするために、申請者は、西欧政治思想のなかから関連する思想家を取り出し、彼らの政治思想についての独特の解釈を示している。本論文の意義を以下に論じておく。

第一に、従来、保守主義という政治思想的概念はいくぶん曖昧に使用される傾向があった。多くの場合、保守主義は理念や理想を語る政治思想とは対極的に、現実的で歴史的な姿勢を示すものとして理解される傾向にあった。保守主義の鋭利な理解者であるマイケル・オークショットに見られるように、現実的で懐疑主義的な性格のゆえに抽象的で理念的なものを排除するという理解がその代表であるが、これに対し、申請者は、保守主義の概念を、理論と実践の間をたえず往復する思考枠組みとして捉え、保守主義を支える理念を見出そうとしている。この保守主義理解は、いわゆる「ネオコン（新保守主義）」を典型とするような今日的な保守主義理解と対峙しつつ、保守主義を現代社会に再生させようという意図をもったものであり、現代的・実践的視点からも高く評価できる。

第二に、申請者は、現代における保守主義の意義を論じるために、18世紀のエドマンド・バークによる保守主義の形成に焦点を合わせるが、申請者はさらに、保守主義の形成をそれ以前の共和主義の伝統との関連において把握しようとしている。この点は本論文のきわめて重要な特徴である。

もともと、ギリシャ・ローマの政治体制を前提にした古典的共和主義の伝統は、政治体制についてのひとつの理念・理想をもち、それが近代的な市民革命にも大きな影響を与えるものであった。それからもわかるように、通常、共和主義の思想伝統は、近代的な革命に対峙することによって生みだされた保守主義とはあい入れないものとみなされてきた。この通常の理解に対して、申請者は、保守主義がその市民的な徳の観念および市民と国家の自律の観念を内包する点に着目し、そこに共和主義の影響を見出す。つまり近代保守主義は、市民的な徳論と政治共同体の自律論を共有するという意味で、古典的な共和主義をある意味で継承しているという。これはたいへんに興味深い解釈であるとともにすぐれて論争的であるが、申請者はこの独自の解釈を説得的に論じている。

第三に、申請者は、共和主義から保守主義への継承を論じるにあたって、古典的共和主義が17世紀のイギリスにおいてジェイムス・ハリントンに受け継がれ、さらにトーマス・ホッブズを経て、18世紀のイギリス商業社会の形成のなかで大きな変容をこうむると論じる。これは思想史家ジョン・G・A・ポーコックの『マ

キャヴェリアン・モーメント』に従った論点であるが、ポーコックのいう「徳から作法へ」という共和主義の転換を、申請者は、古典的政治社会から近代社会への転換とは理解せず、商業社会における古典的共和主義の「組み換え」と解釈しており、この点においても独特の理解を示している。

第四に、申請者は、近世における古典的共和主義の復興者と見なされるハリントンの思想をコンパクトに整理して、17世紀以降の共和主義のパラダイムを明らかにし、かつハリントンと対比する形でホッブズの思想的意味を論じている。特にホッブズ理解においては、ホッブズを近代的ニヒリズムの祖と解するレオ・シュトラウスの解釈を批判的に検討しつつ、国家の安定と個人の生を新たな視点で結合したホッブズ政治論のもつ近代的政治思想としての意味と、その裏に潜む古典的な契機の両義性を明らかにしている。

第五に、申請者は、近年、共和主義研究、あるいはシヴィック・ヒューマニズム論において大きな影響を与えたポーコックの議論を広く参照しつつも、そこに独自の観点を付加している。ポーコックが、共和主義的契機が18世紀以降、アメリカ合衆国へと伝播するという面を強調するのに対して、申請者は、18世紀以降のイギリスにおける共和主義的契機の残存を強調し、「善き生」と安定した国家をめざす「時間の政治学」が保守主義という思想伝統へと変形されるという独自の思想史観を提示している。

このように本論文は、一方で、17世紀、18世紀イギリスを中心とした思想史的研究を広く渉猟・参照しつつ、そこから得られる知見を、現代の保守主義の再生という実践的な関心にまで結び付けようというきわめて刺激的で野心的な試みである。いわば古典的な共和主義から現代の保守主義へという観点から、一貫した大きな思想伝統の流れを描き出しており、いくぶん荒削りながらも、この壮大なテーマを高度な説得力をもって扱っている。個別専門的観点からすれば、いっそう厳密な論証を要求したくなる点もあるが、本論文の意義は、これまでの政治思想研究においてあまり注目されてこなかった保守主義と共和主義という思想に着目し、その両者を結び付けることで、古代から現代にいたる政治思想伝統を描き出した点にあり、その点での独自性と説得性をもった思考力の充実は疑いえない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成２２年７月１日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降